

第2章 本年度の成果及び来年度以降の課題

1 目標設定に対する評価

(1) 「GPS-Academic (注1)」のスコア推移

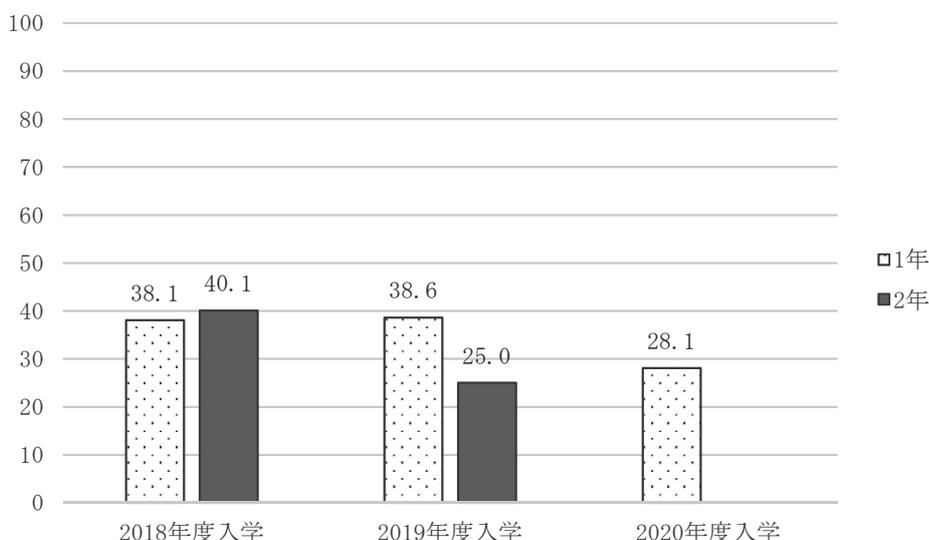
本構想において実現する成果目標として、「高校2学年12月段階で「GPS-Academic」を実施し、そのスコアがA段階(注2)の生徒の割合が50%を越える」を設定している。ここで挙げた「GPS-Academic」は、Benesse i-careerが実施している思考力等を測定するツールである。Benesse i-careerによれば、このツールを活用することにより、「探究活動を通じて、生徒が問題発見・解決に必要な思考力を身に付けることができたのかを可視化でき、外部評価として多様な分野に活用できるとのことだ。

これまでの結果を資料1にまとめた。高校1学年・2学年ともに「②協働的思考力」のスコアがA段階以上となった生徒の割合が大きかった一方、「①批判的思考力」及び「③創造的思考力」のスコアがA段階以上となった生徒の割合が例年よりも低い結果となった。とりわけ高校2学年ではスコアの伸びが低下している結果となっていた。そのため段階別に昨年度との伸びを調べたところ、「①批判的思考力」や「③創造的思考力」については、この1年間でB段階やC段階の生徒については上昇もしくは維持、それに対してA段階の生徒については低下している傾向が見られた。

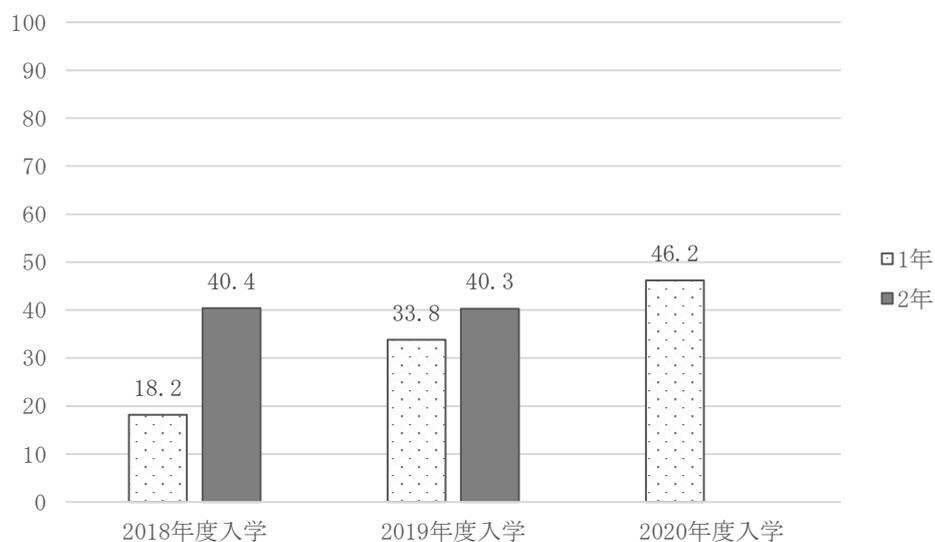
本年度の結果の原因を短絡的に決めつけることは避けるべきだが、2年間の傾向から、現在の本校の取り組みによって「②協働的思考力」は伸びていく傾向があること、一方で「①批判的思考力」や「③創造的思考力」が十分伸ばせていないことを指摘することができるだろう。

資料1 思考力別・GPS-AcademicスコアA段階以上割合の推移

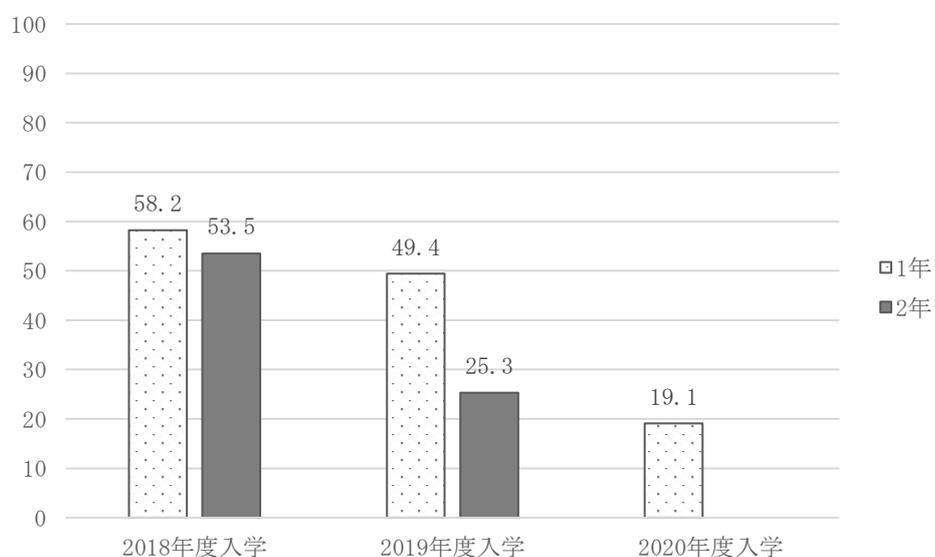
①批判的思考力(必要な情報を取り出し、いろいろな観点から考え、自分の考えを筋道を立てて説明するための思考力)



②協働的思考力（他者との共通点・違いを理解し、合意を得たり、気づきを得たりして人と関わり合うための思考力）



③創造的思考力（情報をつないだり、別の場面に応用したりすることで、問題を見つけ新たな解決策を生み出す思考力）



（注1）2019年度入学生より、本事業の指定を受け、評価の指標として活用している。

（注2）スコアは記述式と選択式の合算であり、A段階以上の数値とは、A段階とS段階の合算の数値を指す。

(2) 校内組織の活動状況

①地域との協働推進委員会

昨年度のワーキンググループを令和2年度に委員会へと改組した。本校の教育活動の中で本事業に関わる事柄のうち、予算編成に対する調整、アンケート等調査（とりわけ高校魅力化評価システム）、報告書の作成、職員研修・先進校視察の企画、外部連携等を担当している。本委員会の果たす役割の特性から、構成するメンバーは教科・校務分掌・学年の多様性を意識し、さらに実際に各事業に関わる職員を選定した。

新型コロナウイルス感染症の臨時休校下の4月末に第1回会合を持ち、それ以降はICTの活用により、適宜連絡を取り合い、在宅勤務期間中でも円滑に職務を遂行できるようにした。

本年度の活動の成果は、本事業に係る事柄について、昨年度よりも計画的に組織的に進めていくことができたことである。予算編成に関する各学年のヒアリングや管理機関である千葉市教育委員会の担当者やコンソーシアムを組む大学との連携を強めることができた。また、高1・高2生徒及び学年職員を対象とした高校魅力化評価システムを実施することができた。

②「総合的な探究の時間」の推進

ア 総合的な探究の時間検討委員会

全学年の総合的な学習・探究の時間に関わる職員が集まり、連絡・調整を行う会議であるが、所属する職員の人数が多く、個別具体的な案件について議論をするというよりは、年度当初の各学年の計画の調整及び、年度末の各学年の取組の総括及び来年度の計画立案をするための委員会である。

本年度は年度当初は新型コロナウイルス感染症の臨時休校の影響で、例年になく暗中模索の中で担当者は進めていかなければならなかった。そのため、本委員会は年度当初には開かれず、担当者間の協議や連携によって各事業は進められた。一方、1学年と2学年は学年合同会議、2学年の国際教養科と普通科については担当者会議が随時持たれ、これらが機能していた。

しかし、来年度はゼミナール活動が全学年に広がり、本事業が最終年度を迎える。また新型コロナウイルス感染症を織り込んだ形で計画立案も求められる。そのため、本委員会の果たす役割はより大きくなるだろう。

イ 第1学年・第2学年合同会議の開催

本年度からの1学年・2学年の学年横断型のゼミナール活動開始に合わせ、職員間で情報共有及び確認をするための会議を、定期的に行っている（10月に1回、12月に2回）。

(3) 外部評価

①第1回運営指導委員会の指導・助言

新型コロナウイルス感染症による影響がある中で、学校として教育活動を進めていることについて全体的として肯定的な評価であった。「千葉市創生プロジェクト」のクラス内発表会の見学を行ったため、指導・助言については高校1学年の生徒発表に関連するものが多かった。論理的かつ提案性の強い発表をすることや大学の教員の効果的な活用について、示唆に富んだ助言をいただくことができた。また、ゼミナール活動につい

ても前向きな意見が多く、図書館の活用やより学術的な内容での探究活動について具体的な助言をいただいた。

②文部科学省との情報交換会（令和3年2月8日）

本校は都市型の地域協働ということもあり、地域からの多様な支援を受けにくい反面、他の指定校と比べた強みとして、コンソーシアムに複数の大学が加わっている点、またグローバル企業のSMB C日興証券が加わっているといった点の指摘を受けた。現時点では、海外交流アドバイザーも含め、地域の外部人材の活用が十分とは言い難い状況であり、来年度の課題としたい。一方、附属中の取組や普通教科との連携について質問を受けた。本校では、情報科や英語科以外の教科でも探究的な学びにつながる取組を行っていると思われるが、視覚化できておらず把握できていないことを再認識させられた。また最終年度に向けて、これらの事業の取組を踏まえて、本校が育成すべき資質・能力を見直し、整理することが必要だと指摘を受けた。

（4）高校魅力化評価システム

「高校魅力化評価システム」とは、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社が提供する評価ツールであり、「学校、地域における生徒の教育環境」の見える化、そして「生徒の成長」の見える化を支援し、授業・指導の改善や、地域との協働のあり方の検討に役立てるための評価ツールである。本校では昨年度に高校1学年の教職員・生徒を対象に実施し、本年度はさらに対象学年を拡大し高校1学年・2学年の教職員・生徒を対象に実施した。

調査方法が、誰が入力したのか学校側が把握できない仕組であったこともあり、1学年生徒が69.3%（316名中219名）、2学年生徒が76.7%（318名中244名）の回答率にとどまっている。教職員の回答数があまり多くないため、生徒の回答に基づき、生徒自身の自己認識に着目して分析を行っていく（資料2）。

本調査の資質・能力は、「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの観点に分けられる。この4つの観点で調査結果を比較すると、とりわけ「協働性」が高く、「社会性」が低いというところに注目できる。

他の3観点と比べ、「社会性」の自己評価が低いのは全国的な傾向であると言え、「社会性」の低さは本校だけの問題ではない。むしろ社会課題への関心も高く、選挙への参加など社会参画意識も他地域と比べて高い傾向にある。また国際社会の課題解決に貢献したいと考える生徒の割合が高い。

一方、自分たちが生活している地域への関心や地域の担い手だという意識は弱く、卒業後も地域で働きたいという生徒の割合が低い。それは本校が都市部に位置しており、都内に通勤可能なベッドタウンであることも関係していると考えられる。

「探究性」については、他地域と比較し高い傾向を示している。日頃の教科学習自体への意欲は高い傾向を示すが、地域課題探究への意欲はそれをやや下回る。また勉強したことを別の問題に応用したり、複雑な問題を順序立てて考えたりすることが苦手だととらえていることも特徴的である。これは、先述のGPS-Academicのスコアとの比較で、彼らの自己認識と実際に測定された思考力の指標との間に一定の相関があることを確認できる。

資料2 高校魅力化評価システム 生徒の自己認識結果（令和2年7月実施）

③ 生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）	全校		
	全体	昨年度との差	他地域との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる自己認識	71.9%	● 5.38	● 4.97
【自己肯定感・自己有用感】	65.4%	● 1.24	● 4.74
49 自分にはよいところがあると思う	75.4%	● -0.27	● 4.43
50 私は、自分自身に満足している	55.5%	● 2.74	● 5.06
【課題設定力】	79.3%	● 10.63	● 10.22
37 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	79.3%	● 10.63	● 10.22
【行動力】	64.7%	● 9.52	● 1.48
38 目標を設定し、確実に行動することができる	63.9%	● 7.47	● 1.02
51 自分で計画を立てて活動することができる	65.4%	● 11.57	● 1.95
【粘り強さ】	78.2%	● 0.14	● 3.43
35 うまくいか分らないことにも意欲的に取り組む	81.0%	● -1.29	● 3.03
45 忍耐強く物事に取り組むことができる	75.4%	● 1.58	● 3.83
協働性に関わる自己認識	79.3%	● 2.96	● 1.87
【受容力】	94.2%	● 3.39	● 3.69
41 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	94.2%	● 3.39	● 3.69
【対話力】	89.4%	● 2.70	● 0.92
40 相手の意見を丁寧に聞くことができる	89.4%	● 2.70	● 0.92
【表現力】	63.4%	● 3.24	● 1.54
47 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	69.5%	● 0.54	● 2.67
48 友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	57.2%	● 5.94	● 0.40
【共創力】	70.4%	● 2.51	● 1.32
42 共同作業だと、自分の力が発揮できる	70.4%	● 2.51	● 1.32
探究性に関わる自己認識	68.8%	● 3.19	● 5.51
【学びの意欲】	72.9%	● 2.26	● 7.17
36 家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	78.6%	● 10.35	● 13.13
58 地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	66.1%	● -1.81	● 10.60
64 学習を通じて、自分がしたいことが増えている	73.9%	● -1.78	● -2.22
【情報活用能力】	74.3%	● 2.71	● 5.20
43 情報を、勉強したことに関連づけて理解できる	81.0%	● 3.13	● 5.53
44 勉強したものを実際に応用してみる	67.6%	● 2.29	● 4.87
【批判的思考力】	49.7%	● 4.29	● 4.57
39 複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	49.7%	● 4.29	● 4.57
【省察力】	78.4%	● 3.49	● 5.09
46 自分を客観的に理解することができる	78.4%	● 3.49	● 5.09
社会性に関わる自己認識	63.1%	● -1.58	● 1.84
【地域貢献意識】	58.2%	● -3.75	● 1.73
62 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	52.3%	● 0.61	● 8.42
53 地域をよりよくなるため、地域の問題に関わりたい	60.7%	● -3.88	● 1.11
55 将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	61.8%	● -7.97	● -4.32
【社会参画意識】	69.9%	● -1.19	● 6.06
54 私が関わることで、社会状況が変わるかもしれない	52.3%	● -3.08	● 5.45
59 地域や社会での問題やできごとに関心がある	70.8%	● -2.22	● 2.03
52 18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	86.6%	● 1.74	● 10.71
【グローバル意識】	61.6%	● -0.19	● 0.26
56 地域の課題と世界での課題は関連していると思う	68.9%	● 1.00	● 0.88
61 将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	71.7%	● -2.83	● 2.75
60 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	44.1%	● 1.26	● -2.85
【持続可能意識】	62.9%	● -1.17	● -0.69
57 地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	55.3%	● -3.38	● -0.35
65 自分の将来について明るい希望を持っている	70.4%	● 1.04	● -1.03

2 来年度以降の課題及び改善点

本節では、前節の議論を踏まえて、来年度以降の課題として、次の①、②を挙げ、それぞれについての背景や改善の方向性を示していきたい。

- ①都市部の高校として、地域とどのように協働し教育活動を行っていくか
- ②「考え抜く力」と「行動する力」を伸ばしていくためにどのように改善をしていけばよいか

まず①については、本校は都市部に位置しており、地域からの全面的な支援を受ける地域密着型の取組を行うことは難しい。一方、本校のコンソーシアムに大学が多く、探究の発表の場面では多くの大学教員から評価を受けることができる。しかし、最終的な成果発表の場だけ、あるいは一部の代表班だけに大学の先生方からの講評を受ける機会を与えるだけになってしまっていることは、本校の強みを十分生かせることになっていないと考えられる。

第1回運営指導委員会で藤川委員や岩崎委員からは、「むしろ探究の過程で、大学の先生方の支援を受ける機会を増やしていく必要があるのではないか」という指摘を受けている。質疑応答の場面をつくることで、生徒たちが自分たちの発表に対する厳しい質問に対応するために、論理を構築し、磨かれていく経験、また探究テーマの設定や探究計画書、探究論文について、今後さらにアカデミックな観点からの本質的な指摘を受けることができる。

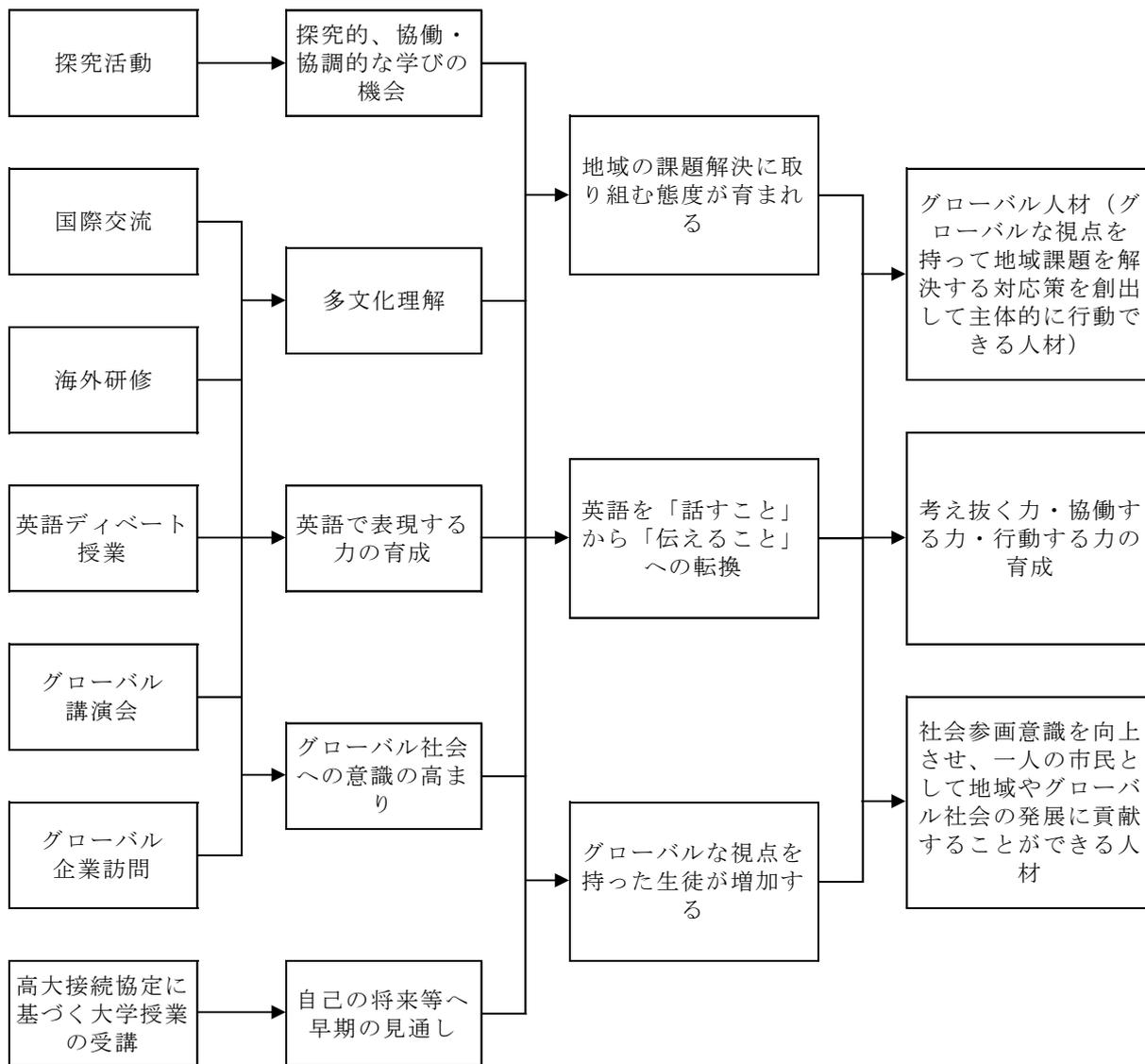
今後さらに大学との協働を行っていくためには、本校の取組に対する理解をより一層深める機会や仕組を構築していく必要がある。特に重要ととらえているのは、千葉県教育委員会や本校の管理職だけではなく、現場で実際に生徒と関わり、探究や進路指導を行う職員が、大学の先生方とコミュニケーションをとっていくことである。そのため、本年度は本校の探究活動を担当する職員が大学を訪問し、関係する先生方と直接議論をする機会を持ち、グローバル企業見学の実施にあたり、企画段階から大学の先生との連携を行ってきた。その成果は既に述べた通りである。来年度は、さらにそうした協力体制の強化を図りたい。

②については、本校の研究開発においては、**資料3**の系統図で資質・能力の育成をとらえてきたが、「GPS-Academic」や「高校魅力化評価システム」の結果から、これまでの2年間の取組で「協働する力」は伸ばせていることは示唆されているが、いわゆる系統図で「考え抜く力」や「行動する力」は十分に伸ばせているとは言い難い。そのため、探究活動の計画を再度見直し、こうした力を伸ばしていくようなカリキュラムへの改善を行い、検証していく必要があるだろう。

また、本校では「総合的な探究の時間」以外の授業でも様々な特色ある学びが行われているが、それを他教科の職員がどのような取組が行われているか、十分に理解されているとは言い難い。本校の3年間（附属中も入れると6年間）の各教科での取り組みと資質・能力を教員間で共有し、視覚化する必要があると考えている。

また本校は、中等教育学校への移行も控えており（令和4年4月開校予定）、これまでの取組、そして本事業の取組の成果をどのように中等教育学校に継承し、発展させていくかも大きな課題となっており、来年度の大きな論点となっていくだろう。

資料3 研究開発に関わる系統図



資料

目標設定シート

ふりがな	ちばしりついなげこうとうがっこう・ふぞくちゅうがっこう	指定期間	2019～ 2021
学校名	千葉市立稲毛高等学校・附属中学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) GPS-Academicを実施し、そのスコアがA段階の生徒の割合（2学年12月時点）					単位：
	本事業対象生徒：		40.4(昨年度18.2)(第1学年：協働的思考力)	40.3(昨年度33.8)(第1学年：協働的思考力)		50
	本事業対象生徒以外：		未実施	未実施		
目標設定の考え方：						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 将来、千葉市に戻り生活基盤を置く生徒の割合					単位：
	本事業対象生徒：		生徒の卒業後、追跡調査を実施する	生徒の卒業後、追跡調査を実施する		50
	本事業対象生徒以外：		生徒の卒業後、追跡調査を実施する	生徒の卒業後、追跡調査を実施する		
目標設定の考え方：						
c	(その他本構想における取組の達成目標)					単位：
	本事業対象生徒：					
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 校内探究委員会の開催回数					単位： 回
	0	0	8	8		8
	目標設定の考え方： 校内での事業の進捗状況を把握する。					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 探究活動の先進校視察					単位： 校
	2	2	2	3		3
	目標設定の考え方： 事業のより発展を目指すために実施する。					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域活動への生徒の参加人数（祭りへの参加、ボランティア等）					単位： 人
	140	140	280	100		200
	目標設定の考え方： 生徒への地域への参画を推進する。2018・2019年度は附属中学校の生徒数を含む。					

b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 探究活動による成果物（ポスター）の展示					単位： 回
	1	1	2	1		2
目標設定の考え方： コンソーシアムの協力を仰ぎ、地域に成果を普及させる。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 成果発表会の開催					単位： 回
	1	1	4	5		2
目標設定の考え方： コンソーシアムの協力を仰ぎ、事業の成果を普及させる。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 探究活動やグローバル講演会等において、コンソーシアムが参画する回数					単位： 回
	0	0	11	7		10
目標設定の考え方： 各機関との連携を密にし、事業を円滑に進める。						
b	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）			960	960	960
本事業対象生徒数			960	960	960
本事業対象外生徒数			0	0	0

資料

令和2年度第1回運営指導委員会 記録

- 1 日 時 令和2年11月24日（火） 午後2時から午後4時45分まで
- 2 会 場 千葉市立稲毛高等学校・附属中学校 会議室
- 3 参加者
 - (1) 運営指導委員
藤川大祐委員（千葉大学教育学部 副学部長）
長田厚樹委員（神田外語大学アカデミックサクセスセンター センター長）
岩崎久美子委員（放送大学教養学部 教授）
藤井剛委員（明治大学文学部 特任教授）
曾我辺穰委員（千葉市美浜区 区長）
 - (2) 千葉市教育委員会
片見悟史課長、臼井武彦主任指導主事、福水勝利指導主事、高雄淳史指導主事
 - (3) 千葉市立稲毛高等学校・附属中学校
佐藤啓之校長、鈴木章史副校長、横田弘之教頭、木下智文教頭、篠筈寿事務長
黒木俊輔教諭、花里卓朗教諭、高梨智也教諭、稲垣順平教諭、生田幸志朗教諭
- 4 内 容
 - (1) 開会の言葉
 - (2) 千葉市教育委員会挨拶
 - (3) 千葉市立稲毛高等学校・附属中学校長挨拶
 - (4) 出席者紹介
 - (5) 委員長・副委員長選出及び挨拶
 - (6) 活動報告（午後2時20分～午後3時10分）
 - ア 昨年度（1年目）の活動報告について
 - イ 本年度（2年目）の活動状況・予定について
 - (7) 授業参観（午後3時20分～午後3時50分まで）
 - (8) 質疑応答及び指導助言（午後4時～午後4時45分）
 - (9) 諸連絡
 - (10) 閉会の言葉
- 5 指導・助言（抜粋要約）
 - (1) 総論
 - ・学校で先生方がチームワークよく、大変なプログラムを作られて、しっかりと進めておられる。しかも新型コロナで色々な計画の変更が必要になった中で取組を進めていただいていることは本当に素晴らしいと思いますし感謝申し上げます。
 - ・このコロナ禍の中でも、今いろいろな形で別の道を探されて、企業訪問であったりとか、成田空港も本当に人がいない状況ですけれども、そういうところでもいろいろな伝手を使って、生徒さんが見学されたりということで、努力されているというところを拝見させていただきました。今後オンラインを環境の差も考慮しながらではありますけれども、うまく使ってやっていければ成果が表れるのではないかと思います。

- ・教員の研修も含めた生涯学習としての探究の授業の意味について、人間的魅力を先生方が高めるという意味でも、探究型をもっと重要視したらいいのではないかと思います。
- ・推進委員の教員がメゾレベルのネットワークの拡充をしていく。推進委員の先生がコーディネートする力によって学校の資源が変わる。このことをやるコーディネートの先生は最もリワーディングで、外の世界と色々な資源とつながれる窓口になれるし、そのことができること自体が教員としての職能をすごく高めることだと思います。
- ・生徒さんが何となくおとなしい感じがして、もうちょっと遠慮しないでバンカラな雰囲気があってもいいかなと思いました。
- ・みんなで教員生徒総参加型でこの学校を魅力化するプロジェクトみたいなものを設定してはどうでしょうか。問いを作るという課題設定能力にすごくつながるので、課題を設定するという力をつけるためにもこういうプロジェクト、生徒が食いつくようなことをやるといいと思います。
- ・何か面白いことをやってほしいなど、思います。そうすると、生徒たちももうちょっと元気になるかなって。何かすごく小さくお利口さんにまとまっている感じがあって、もっと批判的なことを言ったり、もっと課題を挙げたりできる雰囲気を作って欲しいなどと思いました。

(2) 千葉市創生プロジェクト・探究活動・発表内容について

- ・ロジックが不問にされて、表現力に重点が置かれている。探究の本質とこのプログラムの性質からすると、本質的に重要なのは、論理がしっかり詰められていて、聞いている人がこれをやらないといけないなというふうに本気で思えるようなプレゼンをするということ。
- ・プレゼンのスタイルだけに終始していて、中身にも突っ込みたくなるころがあって、理論武装されていない、そういった議論に対抗できるぐらいの精度に上げてほしい。
- ・市長に提言するということになる、論理も要りますし、実現可能性もあるし、それを現実にするには何が障壁かっていうところも考えなきゃいけない。
- ・調査の過程で生徒と調査先の議論が噛み合わない時に、噛み合うように調査をやり直させるなど改善させていくことで、調査をできるようにさせていくことが大切。
- ・実験的に先生やりましょうよ、みたいなことを生徒が言うのは十分あり得ることだと思いますし、これは校長先生が許可されればたぶん実現可能だと思う。そういうふうなところまで持って行って、実際やってみました、やってどうでした、みたいなところまで行けたらすごく意味があることだと思います。
- ・どこかで、先生方でなくてもいいですから手を入れて整理をしていくとよかったんだろうなと思いました。例えば大学生あるいは稲毛高校の卒業生に来てもらって、現役の高校生にそういうアドバイスをしてもらおうというのを何回か入れると全然違ってくると思います。
- ・テーマの決め方とか調査方法とか評価の仕方みたいな総論的なものを、どなたか専門の方を招いて、学年で具体的な話を聞いたり、教室で映像を見る時間を作るといいですね。

(3) 千葉市創生プロジェクト・発表会の進め方

- ・プレゼンが終わってその場で議論がなくて、次のグループにいつてしまうのはもったいない。聞いている大学教員がどんなコメントをするのかというのが重要。大学の教員と議論すること自体がすごくいい経験になる。今のままだとせっかく来ても、あまり対話的にならずに一方的にコメントを聞いて終わりみたいなことになりかねない。
- ・大学の教員が壁になって、突っ込みを入れるという役割として活用するといいい。
- ・大学の先生がわざわざ来てくれたというありがたみを持たせて、こういう人がいるから本気でプレゼンしたいと生徒が思うようにさせたい。
- ・日常の延長みたいな感じであまり緊張感なくプレゼンしてしまうともったいない
- ・聞いている生徒たちもメモを取って、ここは日本じゃなくて外国だと思って厳しい質問をしなさい、ぐらいなことを言って質問を作らせて、例えば時間内に済まないのであれば何かチャットみたいなものに入れるとか、最後には回答させるとか、もっと真剣味がお互いに無いと深まらないなと思いました。
- ・生徒の発表に元気がなかった。発表の仕方はとても大事で、同じ内容でもやはり誠意とか明るい答えであった方が絶対通ります。ですから、そういったものについても少し鍛えた方がよい
- ・資料の字の量が多く、わかりやすく伝えるために図や写真を入れたほうがよい。

(4) ゼミナール活動について

- ・1・2年合同ゼミという形でやっていただければ、先生方があまり細かく言わなくても先輩が後輩に助言をしていくというサイクルができてくるのではないか。これが上手いくと、学校の文化として、しっかりと探究していくということが定着していくのだと思います。生徒さんの中で探究する文化の醸成を進めていただけるとありがたいなと思いました。
- ・ゼミとか新しい試みで面白い、すごいなと思って、プレゼンはお聞きしました。
- ・私も学年解体までいくと面白いなと思いました。雰囲気をよくしたチーム編成にした上で、先輩がチューターというか、先輩が本をいくつか集めてきて読書会するぐらいの勢いでやったら面白いかなと思いました。
- ・図書館は素晴らしいので資料センターとして活用したい。例えば経済だったら経済の大学の基本書を全員で読む。最初に参考文献から入るとか、本から入るのを最初にやるとか、アカデミックスキルを付けることをきちんとやるということがポイントかなと思いました。
- ・先生があんまり上から目線じゃなくてフラットにもっと自由に組織でやった方がいいと、一緒に勉強しようよ、ぐらいの感じがいいと思いました。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）
研究開発実施報告書 令和2（2020）年度指定

発行年月日 令和3年3月26日

編 集 千葉市立稲毛高等学校地域との協働推進委員会

発 行 者 千葉市立稲毛高等学校 千葉市立稲毛高等学校附属中学校

〒261-0003

千葉市美浜区高浜3丁目1番1号

TEL 043-277-4400（高）

043-270-2055（中）

FAX 043-279-0565

URL <http://www.inage-h.ed.jp/>

